

Vol.16

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

知る・見る・考える
八幡市民の
交流誌

きずな

八幡に
活きる

「下り坂もたどった人に、
人生の深みを感じる」

ノンフィクション作家

後藤 正治さん



後藤さんは京都に生まれ、中学・高校は大阪へ。そのあと京都大学農学部を卒業し、会社勤めを経て出版社に入り、やがて医科学を皮切りに文筆の道へ進みます。そして医療・スポーツ関係者をはじめ、詩人やジャーナリストなど、ひとつの世界に生きる人たちの生きざまを描き続けてきました。

講談社ノンフィクション賞を

◆ 目次 ◆

八幡に活きる	… 1
弥生の至宝	… 2
やわたしぜんだより	… 4
活かそう水辺	… 6
中村哲写真展に向けて	… 8
ニュースを読む	… 10
八幡 俳句歳時記	… 11
きずなの文芸／編集後記	… 12

受賞した『遠いリング』では、トレーナーのエディ・タウンゼントとボクサーの井岡弘樹を描き、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『リターンマッチ』では定時制のボクシング部を描き、そして女流詩人の生涯を描いた『清冽詩人茨木のり子の肖像』では桑原武夫学芸賞を受賞しました。他にも『スカウト』や『天人 深代惇郎と新聞の時代』など、読み応えのある作品は枚挙にいとまがありません。

「作品の対象となる人は出版社から提案されるか、自分で見つけます。取材過程で人物のイメージが崩れることはありませんが、それは悪いことではありません。そこに気づきや発見があり、その人の本質が書ければと思っています」。

一つの作品を完成させるまでに2、3年はかかるといいます。1964年の東京オリンピックで「体操の名花」と讃えられたあのベラ・チャスラフスカを描いた『ベラ・チャスラフスカ 最も美しく』では、東欧に出向き、彼女の人生を追って5、6年の歳月をかけたそうです。

取材対象者と向き合う後藤さんは、惹かれるもの、感じるものを大切にしています。それが前述した「気づき」や「発見」につながるのかもしれませんが。

「江夏さんは王貞治さんと13年間戦ってきましたが、デッドボールは一度もなかった。一度ぐらいあっても仕方はないはず。それだけ江夏さんは勝負に真正面から向き合う投手で、外の世界での彼はさておき、グラウンドではクリーンで正々堂々とした人でした」と、『牙ー江夏豊とその時代』を取材した当時を振り返ります。

さらに、「上り坂より下り坂もたどった人に、人生の深みを感じる」と、後藤さんは言います。常に柔和な表情ですが、時折見せる正面から射貫くような視線には、その人の生き方と真摯に向き合い、失敗や挫折、欲望や葛藤、弱さも強さも丸ごと受け入れる作家としての意志が光って見えます。

「嫌いな人はハッキリしています。人格にもとる人、品格や品性に欠ける人は、受け入れることができません」と、きっぱり。

八幡市に住んで20年以上になる後藤さんですが、外出するところが多く、自宅にいる時は、書斎で資料整理と執筆に追われています。目は常に外の世界へ向けられている、そんな感じだそうです。

だからでしょうか、八幡の町の動きについては、あまりご存じありません。

「八幡へ帰ってきて、石清水八幡宮駅で降りるとほっとしますね。あの駅前の佇まいは好きです。粹な感じがしますね」と、ほほえみます。

大佛次郎賞、司馬遼太郎賞などの選考委員も務められながら、最近では自選エッセイ集『掘るべき時代』（ブレーンセンター）を出版されました。

道は時に曲がり、上り、下り、陽の当たる所、陽の当たらない所、その時々さまざまなドラマを生みます。それがノンフィクションなら、なおさらのこと心が動きます。

後藤正治さんの本を、みなさんもぜひ読んでみてください。こんな作家さんが八幡市にいらんだなあと、ちよっと嬉しくなるはずです。

（文・福川肅）



式部谷銅鐸 (6)

濱田 博道

①内里八丁遺跡に弥生時代前期の集落遺跡

式部谷銅鐸(3)で、周辺地域の地図を付けて次のように書きました。「八幡地域では、弥生時代前期の遺跡・遺物は確認されていません。確認されているのは中期の金右衛門垣内遺跡・美濃山遺跡・内里八丁遺跡です。」

ところが、5月の連休中、このことを覆す記述に出会いました。サプライズでした。京都府埋蔵文化財調査研究センター発行『京都府遺跡調査報告集第179集 木津川河床遺跡第32次』(2020年)のp2に、次のように記述されているのです。

「弥生時代前期には集落遺跡である内里八丁遺跡(中略)など大規模な遺跡が湿地に展開する。」

「弥生時代前期に内里八丁遺跡で集落遺跡?」——前期という紀元前4世紀以前になります。内里八丁遺跡の古い遺物として弥生時代中期(紀元前4世紀後半)・紀元後1世紀前半

の土器片が数点出土しているのは知っていましたが、それ以前の「前期」とは。しかも「集落遺跡」だということです。気になり連休明けに、京都府埋蔵文化財調査研究センターに電話をかけて聞きました。回答は次のようでした。

「第二京阪道路建設の大規模発掘調査で発掘団体により発掘地域の分担がありました。京都文化博物館の発掘調査した地域(八幡市内里小字日向堂・上奈良・小字長池)で縄文時代晩期の遺物、弥生時代前期の建物跡、遺物が発掘されたと報告書にあります。そのことから、〈前期集落遺跡である内里八丁遺跡〉という記述になっています。」

そこで、『京都文化博物館調査研究報告第13集 内里八丁遺跡』(1999年)を読むと、「まとめ」に次のような記述がありました。

「(内里八丁遺跡の)遺物は(弥生時代)中期初頭に属するものが中心となるが、前期に属する土器類も少なからず出土した。(中略)土坑は前期の土器が比較的多く出土し、伴出の石器もやや古い様相であるのが注意される。また、遺物の中で石器類の多いことも特筆できる。(中略)なお、数編であるが縄文時代晩期の土器片

も認められたことから、内里八丁遺跡の年代がさらに遡る可能性が高いと考えられる。」

以上により、読者の皆様にお詫び申し上げますとともに、弥生時代前期の記述を次のように訂正いたします。

「八幡地域では、弥生時代前期の遺跡として、内里八丁遺跡があります。土器・石器類の発掘、建物跡も検出されている集落遺跡です。縄文時代晩期の土器片も認められています。このように、八幡地域には古くから人々が住み、営みがありました。」
八幡地域の歴史がとても深く、豊かであることを感じた連休でした。



内里八丁遺跡

第二京阪道路高架下付近(中央)で弥生時代前期の集落跡、土器等が検出されました。

②なぜ銅鐸の時代は終わったのか

銅鐸の話に戻ります。

式部谷銅鐸は弥生時代後期の2世紀に作られ、2世紀代に埋納されました。

最終段階、銅鐸は巨大化し、高さ1mを優に超えます。現存最大の銅鐸は滋賀県野洲町大岩山出土1号銅鐸で、高さ134cm、重量45kgです。文献では『扶桑略記』(平安末期の歴史書、皇田著)に668年(天智7)、近江国志賀郡(滋賀県大津市)で高さ五尺五寸(166cm)の寶鐸ほうたくが見つかった、との記述があります。しかし、3世紀に入ると全国的に銅鐸は作られなくなり、約500年続いた銅鐸の時代は終わりを迎えます。なぜ銅鐸の時代は終わってしまったのか。『日本歴史大事典』(小学館2007年)に次のような解説があります。

「銅鐸は2世紀の終わり頃、『魏志倭人伝』が伝える〈倭国乱〉が収まった頃に使用をやめたとみられる。倭国を統合した卑弥呼が銅鐸に代わる新たな象徴となったと考えるのも一案である。」

銅鐸の消滅に関しては謎が多いです。式部谷銅鐸のように完形で埋納されている銅鐸も多くありますが、割壊して破片にして埋めている例、割られて穴が開いている例、片面を壊して穴の中に倒立させている例、飾耳を裁断し銅鐸を否定するような行為が行われている例、などの報告へ

↓があります。

このことについて考古学者の石野博信氏は次のように述べています。

「銅鐸はなぜ壊されたのか。銅鐸は弥生時代の祭器である。とくに破壊された2世紀段階は、近畿弥生社会のクニグニの祭器であった。それを壊すということは、近畿弥生社会のヘカミを否定するということである。壊さない場合も、徳島市矢野遺跡や奈良県大福遺跡のように銅鐸の中に土をつめこみ、さらに外も土で包みこんで埋めている様は、まさに古いカミの封じ込めである。古いカミを否定し、封じ込めるのは新しいカミを迎えるためである。」(『楽しい考古学』大和書房2007年)



→豊岡市久田谷銅鐸復元
(兵庫県立博物館図録より)

さらに、国立歴史民俗初物館発行『銅鐸の美』(1996年)には次のような記述があります。

「農業は余裕の米を作りだし、それこそが青銅器を鑄造し、鉄器を鍛造

する専門技術者を出現させた。余裕こそが人の上に人をつくり、人の下に人をつくった。初め、力ある人は、皆と共に村の中に住み、皆とともに共同墓地に眠った。しかし、ついには、皆の上にはるか高くそびえ立つ人と変わり、この世の暮らしもあの世の暮らしも、普通の人びとは違う場で過ごすように変わった。彼らにとっては、自らの権威を守り高める神こそが必要である。こうして銅鐸も銅鐸の祭りも消え去っていった。」

つまり、共同体の社会から階級社会の時代へと変化していったのです。

銅鐸が消え去っていくと、かわりに2世紀頃から3世紀前半の日本の各地で、地域特有の大きな墓が造られるようになります。共同体の社会にかわり、強力な力をもった首長が現れ、その人の墓が造られるようになるのです。地域社会のまとまりが大きく変化していく時代です。土器の交流も広範囲に活発に行われます。また、この時期は大洪水など気候変動が続いたことも樹木のセルロース分析などでわかってきました。このことも社会変動の一因ではないかとの説も出されています。

近年、第二京阪道路、京都南道路新名神高速道路、木津川流域の下水



↑古墳時代が始まる直前、各地域で特徴のある大型の墳丘墓が造られます

道浄化センターなどの建設に伴い、南山城地域の弥生時代から古墳時代の遺構(集落、水田など)・遺物(土器類)が数多く検出され、報告書も出されています。

③卑弥呼の時代の八幡の遺跡

銅鐸の時代の終り(古墳時代初頭(卑弥呼の時代)その直後)の八幡地域の遺跡は4つに大別されます。①弥生時代後期の美濃山丘陵上の遺跡②内里八丁遺跡③女郎花遺跡(男山丘陵東麓、八角堂・松花堂美術館近辺)④木津川河床遺跡です。丘陵とともに低湿地にも遺跡が存在します。

このうち弥生時代後期に美濃山丘陵上に多くの集落が営まれ、遺跡として検出されていることは式部谷銅鐸(3)で簡単に述べたところです。

女郎花遺跡は八幡大芝・女郎花に位置する遺跡です。遺跡内には、西車塚古墳(前方部に八角堂が建っている)や東車塚古墳(松花堂庭園の借景となっている)があります。この遺跡から古墳時代初頭の土器類出土しています。

木津川河床遺跡は木津川大橋から3河川合流付近までの東西5km、南北2.5kmの広大な遺跡です。大規模な水害に見舞われて、1868年(明治元)に上津屋集落から淀方面へと北西に流れていた流路が現在の河川に改修されました。八幡市の飛地は旧木津川流路であったことが地図の上からもわかります。新流路となった川底は削られ、地下に眠っていた弥生時代や古墳時代の遺物が現れ、検出されていました。この新木津川流域の遺跡が木津川河床遺跡です。



近年、新流路付近の発掘により、遺構・遺物が数多く出土、遺跡の状況がかなり明らかになっています。(了)

やわたしぜんたい

No. 6 山村元秀

田んぼから見える日本の水環境

市内の田んぼは5月末から6月上旬に田植えが終わります。その時期には田んぼにはミジンコがいっぱい発生し、オタマジャクシやヤゴ、アメンボなどが育ちます。ハウネンエビが大量に発生している田んぼもあり、何気なく見過ごしている田んぼの中を、少し気をつけてのぞいてみるといろんな命が見られます。

そんな田んぼの生き物の変化について紹介します。

トノサマガエルはどこへ行ったの？



ヌマガエル

トノサマガエルは泳ぐ時に抵抗が少なくなるよう頭が流線型になっていて、後ろ足にはヒレがついているので泳ぐのに適しています。卵の数は2,000個ほど。卵はメスの体からでて受精するとゼリー層が水を吸ってふくらみソフトボールぐらいになります。そんなトノ



トノサマガエル

サマガエルが身近な田んぼでは見なくなっていました。田んぼと密接に関わりがあるこのカエルは、水路がコンクリートになり指先に吸盤がないので水路を上れない等の環境の変化で、減少しているようです。京都府レッドデータブックでは要注目種、環境省レッドデータブックでは準絶滅危惧種になっています。

近くで見られる田んぼのカエルはほとんどがヌマガエルです。このカエルは暑さに強く30度を超える田んぼの中でも元気に育ちます。子ども達と見つけたカエルはほとんどがこのヌマガエルでした。

ハウネンエビを知っていますか？



ハウネンエビ

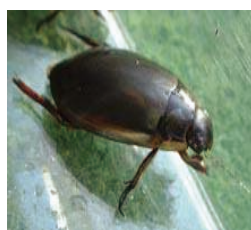
細長い体をして、いつも背中を下にして泳いでいます。その美しさから「田金魚」とも呼ばれます。緑の体に赤い尻尾で優雅にゆっくり泳ぐ姿が、「田んぼ」を泳ぐ「金魚」に見えたことからこの呼び名が付いたのでしょうか。初夏の頃に突然現れ、産卵をすませると1ヵ月程度でいなくなってしまう。エサはおもに植物プランクトンなどをこしとって食べます。ハウネンエビは耐久卵といって、寒さや乾燥によくたえ、水のない環境で何年も休眠状態で生き続けます。そして、適当な温度と水が与えられると一気に孵化し、短期間に成長し次の卵を産んで死んでいきます。



カブトエビ

乾田化がすすむ田んぼではハウネンエビやカブトエビ等が見られても、ゲンゴロウ、タガメ、タイコウチ、ミズカマキリ、コオイムシなどの水生昆虫はほとんど見ることはできなくなりました。淡水魚の産卵場所及び稚魚の成育場所としても機能していた日本の水環境の変化を心配する声もあります。

見なくなったコオイムシ・ゲンゴロウ・ミズカマキリ等の水生昆虫



チョウの分布域北上現象と温暖化

ツマグロヒョウモンは、1970年代までは南西諸島、九州地方、四国地方、中国地方、近畿地方が確実な分



ツマグロヒョウモン

布地域でしたが、1980年代から分布の拡大傾向が顕著になり、1990年代から2000年代には甲信越地方や関東地方でも見られるようになりました。本種の分布拡大の要因として、幼虫がパンジーなどの園芸種のスミレ類も食草として利用できるため、温暖化傾向の著しい市街地での越冬が容易になったことも指摘されています。10年前のNACS（日本自然保護協会）の調査では、東海地方から関東地方にかけての全都県のほか、山梨県、長野県から多くの報告があり、東北地方南部の福島県、山形県、日本海側の豪雪地帯である新潟県、富山県からも記録が届き、定着が

明らかになっているそうです。

ナガサキアゲハは、1970年代までは、本種は南西諸島および九州地方、四国地方と中国地方の西部に分布していましたが、1980年代に近畿地方各地で確認されるなど分布拡大傾向が顕著になり、1990年代には東海地方、2000年代には関東地方南部や長野県南部でも記録されるようになりました。本種の分布拡大の要因として、栽培ミカン類を利用すること、暖冬傾向で耐寒性の弱い休眠蛹の越冬が容易になったことなどがあげられています。

子ども達とミカンの木から採集した幼虫を育ててみると、ナガサキアゲハがたくさん羽化しました。校内でチョウを採集するとツマグロヒョウモンが目立ち、プランターのパンジーにはその幼虫がたくさん見つかりました。クマゼミの増加もそうですが、こうした南方系の生き物が急速に増えてきています。身近な生き物から「温暖化」が進行してきているのが実感できました。



ナガサキアゲハ

園芸種なの？野草なの？



るものが増えていきます。環境に悪影響をもたらす特定外来植物として繁茂が問題になっているオオキンケイギクも、本来は花を楽しむ園芸種として日本に入ってきました。園芸用の草花は、人が世話をしないとちゃんと育たないというイメージがありますが、野生化しにくいとは限りません。日本の風土に適合すると、在来種を蹴散らして繁殖するものも少なくないのです。

ムスカリ、ハナニラ、ランタナなどの花は、よく庭に植えられている園芸種ですが、街中や公園でもよく見ませんか？見かけた草花を調べて、その名を検索してみると、結構な割合で外来種であり、人為的に持ち込まれた園芸種であ

驚異的な繁殖力で耕作による拡散



堤防や川沿いでも見かけるワルナスビ。圃場の耕作により切断された10 cm程度の根片3本を畑に埋めると2年目に21本、3年目には220本、4年目になると923本と、驚異的な繁殖力があり、圃場での防除が困難になります。花はナスビにそっくりですが、茎や葉、花序に鋭いトゲがあり、秋に黄色の実を



つけるが食べられません。ハマスゲにそっくりなショクヨウガヤツリも、畑を耕せば耕すほど広がってしまい、日当たりの良い所には地下部の塊茎が一株で数百個も形成され畑全体が覆われてしまいます。除草剤にも強く、一度蔓延すると根絶が難しく、ともに要注意外来生物です。

活かそう水辺、つながつ流れ ～水辺の恵みと怖さ～

NPO法人日本水防災

普及センター理事長

澤井 健二

水辺は絶えず変化している中であって、大変魅力に富んでおり、私たちにいろいろな恩恵を与えてくれるとともに、時には洪水や水難事故等、大きな脅威を及ぼします。私たちは水辺を活用しつつも、それを傷めないよう、また大きな害を被らないよう、備えを怠らずに、うまく共生していかねばなりません。その知恵や技術は、今に始まったことではなく、長い年月をかけて積み重ねられてきたのですが、努力を怠ると、それがうまく伝承されずに途切れる心配があります。

私たちは以前から、親水行動の普及を取り入れながら、流域にまたがる水文化の伝承に努めてきましたが、近年の全国的な水害の激甚化に鑑み、水防災文化の普及に一層の貢献をしたいと考えて、昨年、新たなNPO法人を設立致しました。

八幡市にも魅力に富んだ多くの水辺があり、この交流誌『きずな』に

も幾度にもわたってその魅力とともに、維持活動の紹介がなされており、そのご努力に大変敬服しています。

私はこれまでも八幡市の水辺をたびたび訪れ、その魅力と課題を学ばせていただいたてきましたが、このたび、『きずな』に寄稿する機会をいただき、大変光栄に存じます。

①水辺の魅力と怖さ

水辺の魅力には様々な側面がありますが、私がまず感じるのは、水辺の景観の心地よさです。それには、視覚からくるものと、聴覚、嗅覚からくるもの、あるいはそれらが合わさったものがありますが、さらに水辺に近づくと、触覚や場合によって味覚からくるものもあるでしょう。私は概して水辺の感覚が好きで、わざわざ水辺に出かけることも多くありますし、わざわざではなく、たまたま水辺に接したときにも、つい足を止めて、その雰囲気や無意識のままに楽しんでいきます。その時、遠景としての景色だけでなく、近景としての、草木や魚、鳥、虫などの動植物、さらにはそこに集う人々との触れ合いがとても貴重で、楽しく思われるのです。そして、そこで人々から教えてもらったり、あるいは予め学ん

でいただいた知識と照らし合わせたりすると、一層楽しさが膨らみます。

水辺には、大小さまざまな景観と作用があつて、それぞれに特徴がありますが、大きな水辺の代表は海で、広々とした空間と打ち寄せる波の取り合わせに私は惹かれます。川にも大小さまざまな景観があり、概して川は長く、流れのあることが大きな特徴です。八幡市の代表的な川と言えば木津川ですが、木津川は三重県の青山高原に源を発し、多くの川と合流しながら下流は淀川を経て大阪湾に至ります。そのようなつながりを想い浮かべると、川の魅力は一層深まります。また、八幡市内には、戸津池、内里池などいくつかの池があり、それらも楽しい水辺です。

しかし、水辺は楽しいことばかりではありません。水が汚れていたり、ゴミが飛散したりしている水辺は、快いどころか、不快感を催したり、有害であることすらあります。また、川は豪雨時には時おり氾濫することもありますし、人が流されたり、溺れたりする危険もあります。水辺と楽しく接するには、それなりのマナーや備えが欠かせません。

②人と水辺のつながり

かつて、人々は各々が川から水を汲み、あるいは引いて、また川へ水を捨てていました。その段階では、人々は常に川を意識せざるを得ず、川の恩恵に直接浴するとともに、川の脅威にも直接さらされていました。ところが時代の変遷とともに、社会は個人の作業から共同作業へ、さらには分業へと進化し、特別の職業あるいは役目の人を除いて、直接川に接しなくても川の水が得られ、また、川への排水が可能になって、川への関心（川とのつながり）が薄らいできたのではないのでしょうか。

このように、川と人とのつながりを考える時、まずは川の利用、すなわち利水の側面が考えられます。そして、より利便性を求めて川に接近すれば、川の脅威にもよりさらされ、治水の重要度も増すことになります。しかし、これも治水の技術が進展し、分業化が進むと、治水は一部の人任せになり、川と人とのつながりが弱くなっているのです。さらに、道路交通の発達による舟運の衰退も、人と川のつながりを弱めているひとつの要因です。川で採れる産物（動植物、砂利等）の利用も近年減少しているように思われます。

③水車文化の衰退と再生

かつて、日本各地では多くの水車が用いられていました。水車の用途には、大きく分けて、水を汲み上げるものと、水の力を利用して、精米や製粉、発電などを行うものがありますが、後者には、水を引いてくる水路と水車小屋を伴うのが特徴です。八幡の近くでは、淀の川瀬の水車が有名です。生駒の溪流では、水車を利用して製薬業が発達したそうです。踏車（足踏み水車）は、揚水あるいは排水装置として、方々で使われたようですが、これもやがてエンジンポンプにとって代わられます。

ところで、最近まで京都の町中に粉挽水車があったのをご存じでしょうか。木屋町通り蛸薬師西入ル南車屋町にある大黒屋本店という蕎麦屋さんの一室が水車小屋になっており、直径2mの大きな水車に連動して、木製ギヤが回転し、臼搗き、臼挽き、搬送、ふるい分けを同時に行える実に巧妙な装置です。残念ながら昨年未だ店内を改装され、その姿を消してしまいました。私たちはその機械部分をお願い受け、京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリーの一室に移設して展示しています。将来、どこかふさわしい場所に再移

設して、動態保存できればと考えています。

現代における水車の主力は、水力発電用のもので、ダム式発電所では大型のものが稼働していますが、近年は方々で小水力発電の開発が注目されています。一方、従来型の水車は、動力を電気に変換するものではないものの、直接歯車や梃子（こぎ）を組み合わせて動かす仕組みは、まさに「からくり」とも呼べる仕掛けで、実に巧妙にできており、懐かしさと共に、昔からの技術の奥深さに敬服させられます。

動力資源が限られていたその昔から、水を動力源とする水車の絶え間ない回転運動と、それによる連続作業は勤勉さの象徴にも映り、そのリズムカルな響きは人を勇気づけ、さらには継続することやマイペースを保持することの大切さを伝えているようでもあります。1951年（昭和26）に再発表されたラジオ歌謡『森の水車』（清水みのる作詞、米山正夫作曲）も、貴重な水車文化を伝承するかのように、今も軽やかに廻り続けています。懐かしい歌詞を掲げて、この稿を閉じます。

♪ 緑の森のかなたから

陽気な歌が聞こえます

あれは水車のまわる音

耳をすましてお聞きなさい ※

♪ 雨の降る日も風の夜も

森の水車は休みなく

粉挽臼の拍子とり

愉快に歌を続けます ※

♪ もしもあなたが怠けたり

遊んでいたくなったら時

森の水車の歌声を

ひとり静かにお聞きなさい ※

※ コトコトコットン

コトコトコットン

ファミレド シドレミ ファ

コトコトコットン

コトコトコットン

仕事にはげみましょう

コトコトコットン

コトコトコットン

いつの日か

楽しい春がやってくる



大黒屋本店から京都大学宇治川オープンラボラトリーに移設した粉挽水車装置
(右奥上方に樋、その下が水車、その手前が木製ギヤ、右柱の陰に搗き臼、中央手前が挽き臼、その左がロープコンベア、左端上方が布製回転ふるい)

この秋、故・中村哲医師
追悼写真展を開催します

医師・中村哲とその業績

中村哲医師追悼写真展

実行委員会・八幡 共同代表

西出洋文

本年、八幡市内で初の故・中村哲医師の追悼写真展を11月18日（木）から21日（日）の4日間、八幡市文化センター展示室にて『中村哲医師追悼アフガニスタン活動の軌跡』写真展として開催します。

今回そのPRとして、『きずな』の誌面をお借りして一部ご案内をさせていただきますことになりました。ご関心のある方は、開催期間に是非ご来場ください。

◆突然の銃撃による非業の死

「ペシャワール会」現地代表であるとともにPMS（平和医療団・日本）総院長の中村医師が、2019年12月4日アフガニスタンで活動中（工事現場へ向かう途上）、何者かに銃撃

され、同行していた5名の方々（運転手と護衛）とともに非業の死を遂げられました。それから約2年が過ぎます。

事件報道を聞いた時の衝撃と憤りは、心ある関心者の皆様とともに今でも忘れる事ができません。

本写真展は、中村医師が38歳で赴任し医療事業をスタートさせ、のちに医療活動だけで命は守れないと井戸を掘り、地下水路を整備し、さらに灌漑用水路を拓き、植林事業や農業事業を開拓してきた35年間の活動と、中村医師の生き様にも迫る約百点の現地撮影の写真を通して紹介するものです。

◆38歳から赴任した動機は

現地への赴任動機については（アフガンとの関わり合いは）、1978年に福岡の山岳会「福岡登高会」ヒンズークツシュ遠征隊に参加したのがきっかけで、幼い時から昆虫と山に興味があった氏は、初めから「国際医療協力」に関心があったわけではなく、むしろ「昆虫に興味が無ければアフガンとは無縁」であったとも述べられています（『私とアフガン』から）。

「もともとペシャワールに行くハメ

になったのが蝶や山に遊びに行つてのつぴきならぬ事態に次々と遭遇し足が抜けなくなつたまでの事である」と語っています。「そこに生きる人々の為に」との思いから、徐々に無私の信念を貫くようになりました、中村医師は、決して最初から高い志から行動したのではないと言っています。

◆医療事業からの始まり

中村医師は当初ハンセン病を専門とする神経内科医として、病に苦しむ現地の人々を救うため、パキスタンのペシャワール・ミッション病院に派遣されました。医療事業を始めたのが1984年。38歳の時でした。

それから現地の人達と取り組んだ医療事業が始まります。その年9月、中村医師の活動を支援する目的で国内にペシャワール会が発会され、1987年頃からの活動は、特にハンセン病多発地の（パキスタン内の）アフガニスタン難民キャンプの巡回診療から始まります。その後、パキスタン・アフガニスタン両国にまたがって数カ所の診療所を開設するなど、活動範囲を広げていきました。

◆井戸掘り事業に展開

2000年、大旱魃による水不足と農地の砂漠化によりアフガンの人々が生存の危機にさらされ、医療活動だけでは命は守れないとして、2008年までに飲料用井戸1600本、灌漑用井戸13本、地下水路3カ所を、地元住民の力を生かした共同作業により再生していきます。この時の中村医師の一言は「エーイ、こゝなつたら行けるところまで行け。対峙する問題から目をそむけて今更現地を見捨てて逃げられるものか」というものでした。

また、2001年に緊急食糧配給事業を開始しました。米英軍の大規模空爆が始まる中、「アフガニスタンのちの基金」を国内に設立。2002年2月までに15万人に主食の小麦粉と食用油の配給を行いました。

◆緑の大地計画へ発展

この基金をもとに、現在も継続されている緑の大地計画が始まります。大河クナール川から取水して、灌漑用水路建設事業・植林事業・農業事業としてつながる35年間の人道的な活動は現在も、故・中村医師の信念とともに、500人の現地の人達と

✓共同事業活動として取り組まれてきています。

この時の中村医師の一言が、「百の診療所より一本の用水路を！」で、白衣を脱ぎ、メスを重機のレバーに替え、大地の医者になる瞬間でした。2002年から開始したこの事業は、幾多の紆余曲折を経て、今日では27余kmの用水路とクナル川沿いに建設した9カ所の灌漑施設によって、1万6500ヘクタールの農地から小麦、米など多くの農産物が生産され、65万人余りの人々が安定した暮らしを享受しています。

特筆すべきことは、中村医師が現地の人たちの文化と信仰を尊重して事業を進めたことです。その一環として、自らはクリスチャンでありながらイスラム教のモスクやマドラサ（イスラム神学校）の建造を進め、地域の人々の信頼と感謝を得ました。

◆中村哲医師のプロフィール

1946年9月15日、福岡市で誕生。成人して九州大学医学部（脳神経内科）に入学。1984年5月ペシャワールのミッシン病院に勤務（38歳）します。

『花と龍』で有名な玉井金五郎（若松で港湾荷役業を営んでいた）の孫。

その俠客に抱かれて育ち、『糞尿譚』『麦と兵隊』『花と龍』の作で知られる火野葦平は母方の伯父にあたります。親族の中で金五郎に性格が最もよく似ているのが哲さんと言われています。また、小さいころから論語の素読をさせられ、わりと保守的な中村哲は昆虫好き、虫の宝庫の山に登るようになり、アフガンへも最初山岳隊員として行ったのです。

中村哲はクリスチャンですが、儒教をベースにした儒教クリスチャンであるという人もいます。

2020年12月には天台宗（総本山延暦寺）から「天台特別振興賞」が贈られました。同賞は、1997年に創設され、受賞者は中村哲氏で2人目。受賞理由は、最澄の教え「一隅を照らす」を氏が座右の銘として現地の人々とともに活動が続けられたことで推挙、表彰されました。

◆平和への思い

中村哲の発言に次のものがあります。

「私たちが難民の診療や農業用水路の整備といった活動をできたのは、日本が人道支援を前面に押し出し、軍事的な関与に慎重な姿勢を取り続けたことが大きい。この軍事への消

極性が我々を混乱から護ってきたのは間違いない。出兵した欧米諸国と対照的に、日本への親密感はずれなかつたのです（2014年）。又、平和憲法の下でこそ、どんな山奥に行っても、日本人であることは一つの安全保障であつた。」とも語っています

「人は愛するに足る、真心は信じるに足る」の名言をもって、現地の人達との共同作業に徹した活動をおこないました。

日本国からの表彰としては、1988年外務大臣賞、1996年厚生大臣賞。2016年秋の叙勲旭日双光章、死去に伴い2019年旭日小綬章、内閣総理大臣感謝状等が授与されました

◆ペシャワール会とは？

写真をお借りした、協力名義のペシャワール会は、1983年に中村医師の活動を支えるために国内で600名のメンバーで設立され、現地での活動状況の広報や財政的な支援をおこなってきましたが、現在では2万2000名を超える支援者と8百余の団体会員が活動を支えています。

以下の内容で、写真展を開催しま

す。但し、コロナ禍により八幡市文化センターが使用中止の場合は延期となります。

※コロナ対策により、入場者制限（常時40名以内）・マスク着用・消毒・クラスター対策等のご協力をお願いします。

Ⅱ開催要項Ⅱ

緑の大地計画 用水路が運ぶ

恵みと平和

「中村哲医師追悼

アフガニスタン活動の軌跡」

写真展

38歳になってから日本人医師が、医療からなぜ用水路を開拓するまでに至ったのか

主催団体 「中村哲医師追悼写真

展実行委員会・八幡

後援 八幡市・八幡市教育委員会

（申請中）

協力 NGOペシャワール会・

PMS（平和医療団―日本）

会場 八幡市八幡文化センター

1階展示室

写真展 写真・パネル約百点、映像

コーナー

日時 2021年11月18日（木）

～21日（日）の4日間 午前10時～午後6時

※入場無料



今日の中国の動きを

どう見るか

野々村好豊よしかず

私は日本の行く末を非常に心配している。

それは近年、中国の海洋進出と軍拡路線が顕著になってきているからだ。中国による南シナ海での西沙諸島・南沙諸島の不法占拠と軍事基地化をはじめ、新疆ウイグル人やチベット人に対する虐殺行為、内モンゴル族に対しての中国語強要、香港への民主主義運動の弾圧と国家安全維持法の強行制定、台湾に対しての経済制裁や軍事圧力など、数多くの報道がある。これらは、世界中の人々にも強い不安と警戒心を与えている。その中でも特に、我が国の領土である尖閣諸島・沖縄海域での中国海警局による領海侵犯は深刻な問題である。今だに世界中で蔓延が続き、終息できない新型コロナウイルスだが、中国はこの新型コロナウイルスの発生源を隠蔽し、アメリカなどの他国のせいにした。これは大国の振る舞い

とは言い難い。

21世紀になっても、自由・人権・民主主義といった概念を守らない中国に対し、世界は後進国の印象を持っている。中国は何かにつけ内政干渉と言うが、そもそも人権・人道問題は内政干渉には当たらない。それらは、中国の国内問題ではなく国際的な問題である。

5年前、アメリカのオバマ政権下、欧米諸国や日本は、中国が経済的に豊かになれば民主化するだろうという甘い見通しをした。そして中国がここまで強気に出るのは、中国の安価な労働力と市場に目が眩んだ日本企業にも責任があると考ええる。

最近、オーストラリアの戦略政策研究所は世界に向けて、ある調査結果を発表した。その内容は2017年から2020年まで10万人を超え、新疆ウイグル人が、中国共産党政府の指示により、強制収容所から中国全土の工場に送られて、強制労働をさせられたというものである。調査結果で衝撃的だったのは、その工場の中に三菱電機、任天堂、ソニー、ユニクロ、シャープ、日立製作所、京セラ、無印良品、東芝など、日本を代表する企業が名を連ねていたことだ。

この強制労働による、恣意的拘束の中で作られた商品は世界の市場に出まわっているが、売上のほとんどがウイグル人の手には行き渡らず、中国共産党政府の貴重な資金になっている。中国はこれを「強制労働ではなく、ウイグル人の再教育」だと世界に説明しているが、実態はジェノサイド（民族浄化による大量弾圧・大量虐殺）に近い。その証拠に中国共産党政府の正式な国家統計である「中国統計年鑑」では、新疆ウイグル人自治区における少数民族人口がこの2年間で164万5000人も激減している。そして中国がこれを事実として認めたことから、世界中から「現代版ナチス」と批判されている。

国際法では、特定の民族を弾圧している場合「人道に対する罪」とし、最も深刻な人権侵害の犯罪としている。間接的とはいえ、もしこのまま日本の企業が人権侵害に加担することと続けるのであれば、重大な国際問題にも繋がる。

私がいつも腑に落ちないのは、この中国の行動に対し、普段は「人権」や「民主主義」を声高に叫んでいる野党や日本のマスコミが、何も非難せず静観していることだ。これは中

国に忖度していると世界中から思われても仕方がない。

日本政府は中国の行動に対し、いつも「懸念」「抗議」「遺憾」だと言っているが、中国からは完全に見下されている。

もはや「平和」を口にするだけで、平和を確保できるような甘い時代ではない。戦争を避けるためにも、日本は尖閣、台湾、東シナ海、南シナ海で自衛力を高め、日米印豪が連携強化していくべきだ。

戦後、日本を守り、平和を維持できていたのは、在日米軍や自衛隊の存在、そして日米同盟の維持があったからである。今こそ、日本は憲法改正の時期に來ていると私は強く思う。



八幡俳句歳時記 12

『だんだん俳壇・兼題異聞』

だんだん俳壇 事務局

塚本正

昨年の7月、男山団地の交流拠点『だんだんテラス』の新たな展開を期待して、情報誌の「だんだん通信」に俳句の投稿欄を作りました。

表紙の写真を兼題とする「だんだん俳壇」です。

俳句の持つ力でしょいか、思わぬ展開を見せています。

第3回「だんだん俳壇」で面白いことがありました。兼題写真はだんだんテラスに忘れられた手袋でした。選者のM先生が応募句の四十四句を読み進めると、それぞれが対句になったり絡み合ったり、共演して物語となることに気づかれました。



【忘れられた手袋の物語】

「右手袋忘れし去年だんだんテラス」（爺爺）。だんだんテラスに忘れられた手袋が「冬室に老婆おろおろ探しもの」（雅美）と老婆に探され、誰かに「拾われて堀で主待つ赤手套」（悦子）、団地の塀に掛けられた「愛着の手袋団地に見つけらる」（たかこ）。

手袋は運よく持ち主に返ります

その手袋の持ち主の生い立ちも応募句が語ります。「ブランコに小さなミトン揺れにけり」（MIRUKA）、ブランコで遊んでいた少女が成長して、恋人と初めて手をつないで、「ポケットで恋人つなぎ雪の夜」（静香）と、可愛く頬を染めます。

そのカップルも、年を重ねて共に

白髪となり「手をつなぎ冬枯れを行く古い二人」（静香）。その媼の脳裏には故郷を出るとき「さよならの手袋振っていつまでも」（麦子）見送ってくれた母の面影が去来しています。

手袋は忘れられて物語となりました――

この物語は選者のM先生が選句体験の一つとして選評に添えられた「兼題異聞」です。応募句の一句一句に心を込めて選句されたことが窺える物語です。

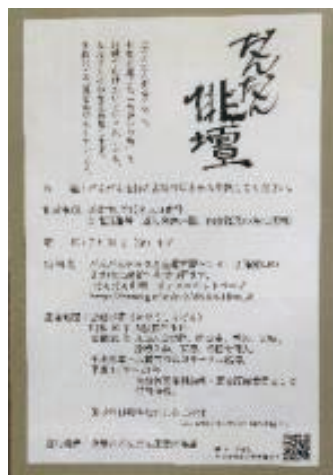
兼題写真の手袋は焦点が明解で、応募作品の句意が互いに絡みあい、それに反応した選者の鋭敏で柔軟な感性の所産です。

選者のM先生には「だんだん俳壇」の新たな展開の可能性を見せていただきました。有難うございました。



「だんだん俳壇」開設時の案内

「だんだんテラス」の投句箱と募集要項に記載のQRコードからも応募できます。



『きずな』の文芸

《俳句》

打ち水や待ったはなしの夕将棋
向日葵の頭を垂れる昼下がり
遠雷や騒ぐ愛犬もう居らず

— やすお

夕風の大山蓮華香りたつ
合歓の花幼な馴染のみまかりし
十葉や夕映の庭白くして

— 千

語り部の訥々として原爆忌
浜木綿や地球の形見える町
水蓮の花ほつほつとして立ち上り

— 淑子

薫風に髪遊ばせて御幸橋
香ばしき楠は町の木明け易し
畑二面気骨漲る葱坊主

— せい子

飛び魚の大脱走のごとき群れ
昼寝覚め「百年の孤独」臍の上
休診が廃院となる夏の果て

— 信

追憶は桜花耀ふ昼昏き
空耳や風のゆくえをとどめぬて
ジャムすくふ愁ひといふにあらねども

— 萩の葉

紫にこぼるる鉢のすみれかな
葱の芽や故郷の香と重なりぬ
水温む岸边なつかし製材所

— 栄

夏の雲ガイドの半纏肩褪せし
総会の中止二度目の梅雨に入る
側転の真直の両手夏燕

— みやこ

山鉦の今年も動かず接種券
河童忌やコロナワクチン「蜘蛛の糸」
変種株天啓としてエゴの散る

— 爺

梅雨の空人から人へ風渡る
夕暮れや有意義だったか鴉啼く
ワクチンを待つ人多し梅雨の街

— 瑞鶴

猫部屋となりて五年目沙羅の雨
海神の化身や飛魚のジャンプ
紙コップに新茶おすすめ宇治界限

— えつ

打水や心づくしのもう二杯
片陰の階に猫眠りおり
猫の目にブルーを写す梅雨の午後

— 幸水

御開帳伽藍を渉る青葉風
水槽の水母を仰ぐ銀行員
辿り来て夕焼けに染まる熊野灘

— 重悟

《川柳》

ゴキブリよゆっくりお休み紙の家
熱帯夜羊が部屋に溢れている
電線の雀も守るデイスタンス

— 笑楽

宴会に行かぬと言えぬ人ばかり
ただ酒を断らぬのが自慢です
病院は渦中の人の駆け込み寺

— えつ

《短歌》

夕光の二月堂の回廊を

ふりかへりつつ君に添ひゆく

わが髪に螢とらへむ指差し

星明りほど光りてゐたる

三条の駅の柱にもたれつつ

あの日の君が待ちゐる夕

— 萩の葉

◆読者の皆様へ

「きずな」17号は10月中旬に発行
されます。秋の俳句や川柳、短歌
をふるってご投稿ください。

×切：9月5日

宛先：〒614-8332

八幡市橋本新石22-11

FAX 075・983・5278

土井三郎

編集後記

近畿圏が梅雨入りした間もなくの頃、後藤正治氏のお宅を訪れた。「清冽 詩人茨木のり子の肖像」とプロ野球スカウトを追ったドキュメント『スカウト』。余りにも違う世界を描いたノンフィクション作家・後藤正治氏とは如何なる人物か。一時間ほどの会見で半分ほど納得することができた。但し、氏の著作をもっと読みたい。そんな思いが募った。◆国交省の河川部局にも関わりのある澤井健二氏には、治水や利水、そして環境の問題など川を丸ごとどう理解すればよいのか執筆して頂きたいと思い、怖いもの知らずで要請し、快諾を得た。八幡ルネが長年河川浄化に関わっていることを知っておられ、そのことに応えたいと仰る。身に余る光栄である。◆今秋、中村哲写真展を開催する実行委員会のメンバーに中村哲氏の人と業績を述べてもらった。その生涯には、「ボランティア」とは何かを知るヒントがありそうだ。◆野々村好豊氏には市民目線で隣国中国の海洋進出の動きを直截に語って頂いた。「ニュースを読む」のコーナーはこれからもいろいろな方に語ってもらいたいと思う。同時に忌憚のないご意見も。 — 「きずな」編集委員会 —

協賛金のご協力をお願いします

(郵) 00940-8-196292 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会
(銀) 京都銀行男山支店 普通預金 4165224 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会